

# 特別インタビュー

## 作家 幸田真音さん



著作『大暴落 ガラ』で東京都心が洪水に見舞われる様と、円や国債等の大暴落が同時に起こる危機的状況を描いた作家の幸田真音氏。今号の特集テーマである「情報」について、「災害」と「情報の伝え方」を作家の視点で語っていただいた。

——2017年3月に発表された『大暴落 ガラ』では、国債・円の大暴落と荒川の大洪水という国家的な2つの危機を取り扱われましたが、そのきっかけと狙いはどのような点にあったのでしょうか。

日本は世界の中でも、また歴史的にみても、自然災害の多い国です。それだけに、災害に対する心構えが常に求められています。ただ、企業の事業継続計画（BCP）などにも見られるように、これまで地震対策についてはマニュアルの整備や、避難訓練が進んでいるのに比べて、大雨への対策は意外な盲点になっているのではと以前から感じていました。

一方で、近年は台風の巨大化や、過去に経験したことがない集中豪雨などにより、災害の激甚化、深刻化が起きています。読売新聞のウェブ版でこの作品の連載がスタートしたのは2016年1月からでしたが、発表したあとから、現実に想定外の大雨や、短時間の河川の増水などが次々起きてしまい、まるで自分の書いた小説が目の前で実現しているかのような、背筋が寒くなる思いを何度も味わっています。

私自身は、マクロ経済や金融が専門なのですが、国の財政

問題と自然災害は密接に関わっていると以前から懸念していましたので、ごく自然に今回の『大暴落 ガラ』のストーリーが生まれました。

これは、以前に黒木瞳さん主演でテレビドラマ化もされた、前作『スケープゴート』の続編です。日本初の女性総理大臣が誕生した直後に、スタートしたばかりの政権運営と大雨災害、さらには国債市場や財政問題が重なるという、近未来的な展開になっています。

——荒川を選んだ理由は何でしょうか。

2015年9月の鬼怒川決壊による災害では、避難指示を出すべき市役所が水に浸かりました。指示を出すはずの拠点自体が被害をこうむることで、災害がさらに拡大することは今後も懸念されます。

首都圏の要である荒川、隅田川を含め、東京ではこれまでも川の氾濫と戦ってきた歴史があり、いまの隅田川が実は昔の荒川で、現在の荒川は放水路として整備されたものです。私は、幕末から明治、大正、昭和と歴史経済小説も何作か書いていま

すが、昔の下町では避難用の船が常備されていたとも聞きました。

荒川放水路の完成後、高度成長期を経て地盤沈下が起き、東京湾の海面より低い土地、いわゆる海拔ゼロメートル地帯や、浸水想定区域内にはいまや二百万人近い人が暮らしています。ただ、そのことも普段は忘れがちです。一度立ち止まって、多くの方々と問題意識の共有をしたいという強い思いがありました。

——荒川では浸水想定区域を公表しています。これまで200年に1度の洪水の想定だったものを、2016年に想定最大規模（いわゆる1000年に1度というような規模）の洪水を想定したものを新たに公表しています。

『大暴落 ガラ』の連載が始まる前、荒川下流河川事務所に取材に行きました。河川事務所では、緻密なシミュレーションを行い、結果を公表しておられます。

しかし、たとえば浸水が想定される地域の電柱に浸水想定3mと貼ることについても、水害への意識が高まってよいとの意見と、そんなものを貼りだしたら地価が下がるので困るとの意見があるようで、改めて対策にはさまざまな苦勞があるのも知りました。

——リスクを示すことのメリット、デメリットについてはどうお考えでしょうか。

災害は、忘れたころにやってくるものです。社会が高機能化されるにつれ、人為的な災害のリスクも高まっています。どんな人生や生活にも、リスクはつきものですので、そのリスクをどうやって管理し、制御するかということが大事なのです。

リスク管理や危機対応の基本は、想像力（イマジネーション）と準備（アクション）です。まず、どういう時になにが起こるのかを想像することです。他人には起きるかもしれないけど、まさか自分には起きないだろうという「正常化バイアス」に陥るのではなく、想像力をたくましくすることが重要です。

想像できる力を高める助けになるのは情報です。情報を収集し、想像力を膨らまし、最悪のケースが具現化した時に、自分はどのような問題に直面するのか。常に情報収集し、それを自分なりに分析して、次のアクションに繋げていくことが大事なのです。

なかには見たくない、知りたくない情報もあるかもしれませんが。災害なんて自分とは無関係だと、人は無意識に考えがちです。でも、知っておくことで、準備することができるのです。いまは情報があふれる時代です。膨大な情報のなかから、正確な情報を適切に得るための日頃の判断力も求められますね。

自分がその次の被災者にならないために、また「逃げ遅れゼロ」を目指すためにも、日頃から危機意識を持つておくことは助けになります。その意味においても、『大暴落 ガラ』で疑似体験をして頂くことも意味があるのではないかと考えています。

## プロフィール



米国系銀行や証券会社で、債券ディーラーや大手金融法人を担当する外国債券セールスなどを経て作家に転身。国際金融の世界を舞台に、時代を先取りするテーマで次々と作品を発表し話題になる。2000年11月に発表した『日本国債』（上下巻・講談社刊）は、ベストセラーとなり、2014年4月18日、『天佑なり』にて第33回新田次郎文学賞を受賞。テレビやラジオ番組のコメンテーターとしても活躍。政府税制調査会委員、財務省・財政制度等審議会委員、国土交通省・交通政策審議会委員、NHK経営委員会委員などを歴任。

——『大暴落 ガラ』を読まれた読者の皆様から大きな反響があったと伺いました。その中には、「荒川の洪水」についてのご意見やご感想もあったと伺っていますが、具体的にはどのような内容だったのでしょうか。

ヨミウリオンラインで連載中に、荒川が決壊した際に浸水が予想される地域に住んでいる読者の方から、「これは本当に起きることなのか」と心配された切実な質問が寄せられました。この作品はあくまでフィクションであり、私自身はこんなことが現実には起きないように、との願いを込めて書いています。でも、絶対に決壊しないとは言えないのも事実です。「毎日の暮らしのなかで、災害への感度を高めておく良いきっかけになった」という読者の声もありました。

作中では、大雨災害と同時に起きる日銀の債務超過による金融市場の大暴落も描いています。国の財政や国債市場の問題は一般にはなかなか理解しにくいものですが、現在大量に国債を買っている日銀の存在は、言わばスーパー堤防のような存在とも言えます。つまり、巨額のリスク資産を買っていてジワジワと暴落のマグマが溜まっているような日銀の存在と、スーパー堤防によって急激な水位の上昇が見えなくなっているというような、日銀とスーパー堤防とを対比することで、両方の問題が理解しやすかったという読者の反応も頂きました。

ほかにも、企業のBCP担当者の方々から、大雨被害についての「必読書」だとの声もいただきました。社内の多くの方々を読んでくださっているそうです。ミサイル、テロ、経済危機、地震などのさまざまなリスクが想定される現在、企業経営の現場では、突発的な事態が発生しても、いかに事業を持続していくかが重要課題になっています。これまで水害については対策の優先順位は高くなかったけれど、『大暴落 ガラ』を読んで、大雨の被害対策を強化したり、実際に避難訓練もしたとの話も聞いています。



——「スーパー堤防」は、堤防の幅を広くすることで、堤防を水が越えたとしても普通の堤防のように決壊しないというものです。ですから、荒川沿いのゼロメートル地帯では必要です。荒川の堤防の現場にも足を運ばれたと聞きました。

堤防の現場はもちろん、荒川下流河川事務所にも詳しく取材をさせていただきました。

海抜ゼロメートル地帯では、通常でも毎日 24 時間ポンプで排水しており、万が一にも荒川が決壊した場合には、水没した地域には海の水が流れ込み、溜まった水は容易に引いてくれないという特殊な事情があります。東京湾だけでなく、伊勢湾や大阪湾も同じでしょう。たとえば英国ロンドンの場合は、街はテムズ川よりずっと高いところにあります。ただ、東京はもともと川の下流に開けた地域であり、また高度経済成長期の地下水や天然ガスのくみ上げによる地盤沈下も起きていますので、その分災害に脆弱といえます。

鉄道の鉄橋と堤防の高さの逆転現象についても、何年前から問題視されていますが、土地買収や整備費用の負担問題が決着せず、20 年以上ものあいだ問題が先送りとなっているのが現状です。最悪の事態をいかに起こさないようにするかと、国土交通省の水管理・国土保全局、河川事務所が日頃から腐心されている現状は、一般の人にはなかなか伝わっていない。このような縁の下の力持ちに光をあて、協働して地域を守っていくことが重要だと考えています。



図 荒川のスーパー堤防 (高規格堤防)  
(出典：国土交通省ホームページ)

——昔は、地域を守る組織として、川の沿川の人で構成され、何かあった場合には、みんなで力を合わせて氾濫を抑えるための水防組織が各地にありました。

この作品は、地域で協力し合って、一緒に助かろう、救われよう、という願いを込めて書いています。不安感や危機感をあおるつもりは毛頭ありませんが、小説で大雨災害の疑似体験をしてもらうことで、いざという時のための日頃の対応策や、心の準備など、適切な危機感を持ってもらえたら嬉しいですね。

河川管理の現場のご担当者から、「必要な情報を伝えたい」という話を何度も聞きましたし、伝えるために、シミュレーションビデオをつくるなど、いろいろと大変な努力をされていることも聞きました。

小説の場合、読者の反応によって、自分が伝えたかったことが伝わっているかどうかを実感することができます。時には、思っていた以上に大きな反響が返ってきて、嬉しい悲鳴をあげる時も。

ちょっと逆説的ですが、小説という「物語 (フィクション)」だからこそ、伝えられる「真実」もあります。読者は、作中のさまざまな登場人物のなかで、自分に近い人に感情移入して読んでいくことができます。ストーリーの展開を頭のなかでビジュアルに想像することで、リアリティを持って疑似体験をしてもらうことができるのです。

——行政としても、一生懸命情報を伝えようとしていますが、十分な手応えを得ることができないことが多いと思います。情報を伝えるという意味で苦労している点、工夫している点は何でしょうか。

情報を正しく伝えるのは本当に難しいですね。伝える側も受ける側も、最近はずっと難しくなっているなど痛感しています。そんななか、対象となる多様な層をすくいあげ、マルチかつ立体的に伝えられるという点で、小説は情報を伝えるために、とても有効なツールではないかとも感じています。

私自身、作家になって 23 年になりますが、小説としていかにおもしろく、かつ正しい情報を伝えるかに日々苦労してきました。情報に重きを置き過ぎると物語の流れやテンポを壊してしまいかねず、一方で、情報自体がとてもおもしろいので、もっと伝えたい、知ってほしい、という欲が出てきたりもします。

講演も同じですね。主催者と聴衆の期待するものが微妙にずれている場合もありますので、聴衆が興味を持ち、なにを欲しているかを、その場で感じ取りながら話を進めます。情報を伝える場合は、ひとりよがりになってはいけません。人は知りたい、見たいと思っている情報しか目には見えないことを理解しておく必要があります。ただ、見えていない、見ようとしないうところにこそ真実があることも、ぜひ伝えていきたいですね。

情報を伝えるにはテクニックも必要でしょう。やみくもに強く押し出すだけでなく、相手の関心度を見極め、理解しながら、誘導していく工夫が必要です。

とくにリスク情報に関しては、「知っておかないとあなたが困る」というメッセージできっかけを作り、「もっと知りたい」と関心を持たせて、より深く聞いてもらうというプロセスでしょうか。

——鬼怒川が決壊した時、ヘリコプターがたくさん飛んできました。ヘリコプターが飛んでいる姿はある面では絵になって、



すごいドラマチックですけど、ああやって救助のヘリコプターがたくさん飛んでいるというのは、結局、多くの人が避難してないということですよ。

鬼怒川の決壊の時、ヘリコプターで救助されていたニュース映像は衝撃的でした。災害時には想定外のことが起きるものです。高齢者や介助が必要な人、介護のために動けない人など、避難したくてもできない人もいます。避難できない人たちと、避難はできるが避難しない人とは、分けて考えるべきでしょうね。

避難したくない人の首に縄をつけて引っ張っていく訳にはいかないのです。避難するのは嫌だという人に対しては、避難をしないことで、周囲にどんな迷惑がかかるのか、周りの人が悲しむ、あなた自身も損をするし危険な目にあう、周りの人も危険をおかして救助にいかねばならないので二次被害を招く、といったことを十分に伝える必要があります。

家族が寝たきり、自分自身が歩けないという事情の人に対しては、行政が救助の手を差し伸べる必要はありますが、マンパワーの限界があります。いざという時に、誰が助けて一緒に逃げるのか、平常時から地元の町内や隣組など、地域単位で常に考え、準備しておくことが大事ですね。

——地域単位にシステム化できていれば、情報提供も効率的にできそうですね。

災害時の情報伝達は、人伝に、伝言ゲームのようにしていくことが現実的なのではないでしょうか。もちろん携帯からの情報も活用できます。ただ、いざという時には、家族単位、ご近所単位で考えるのがよいと思います。危機に対する意識を高めるためには、災害が明日にも起こる可能性があるという

危機感の共有が必要で、その一助をこの小説が果たせるとしたら嬉しいですね。

ある企業では、地下階に浸水しないよう、これまでも高さ2mの止水板が入りに用意されていたが、実際に作動したことはなかった。しかし『大暴落 ガラ』を読んだからは、定期的に作動させる訓練や点検を行うようになったと言われました。

このように企業では、消費者や社員や株主を守るためにも、事業をストップさせないための対応として、防災設備の作動点検、定期的な訓練、安否確認など、企業単位で災害対策の見直しが進んでいます。とくに大企業が密集している地域では、思わぬところまで影響が拡大しかねませんからね。

地下鉄や地下街なども同じです。とくに地下網が縦横無尽に広がっている東京の場合は、どこで止水するかということが大きな鍵になってくるでしょう。水は高いところから低いほうへ流れますから、地下をストローのように水が伝い、遠隔地でも、予想以上に広範囲に被害が及ぶことがあります。ひとつの盲点として、そんな情報も出していく必要があると思います。



### 『大暴落 ガラ』

中央公論社 2017年  
本体価格 1700円 + 税



——自治体についてはどうでしょうか？広域避難の課題があると思います。災害が起こった後、堤防が決壊した後は協力しやすいかもしれませんが、決壊する前から協力するのは、難しいのも現状です。

現在、避難指示は各自治体が担うことになっていますが、大規模な災害になれば、広域避難が必要になります。また、隣の自治体からの助けを出すなどの、連携、協力が欠かせません。

『大暴落 ガラ』では、着任直後の女性の総理大臣が「緊急事態宣言」を発令します。雨や風、台風はある程度事前に予測ができます。ただ残念ながら、今の日本では、起きていない災害に対する宣言はできません。法的な災害対策が日本では成熟していないのです。

「緊急事態宣言」を発令することで、地域全体へ一貫した指示を出すことができます。自治体の個別の首長に任せるだけではなく、上からの一貫した情報、一貫した指示によって、お互いに協力することができます。たとえば、現場において河川が氾濫しそうという危機感を持っていたとしても、電車を止めるとなれば、避難の足をどうするのか、経済的な被害はどうするのか、といったことも含めて、情報収集し、総合的に判断・決定をする必要があります。これを担うのは政治家です。『大暴落 ガラ』では、女性総理自らがリスクを承知で決断し、アクションを起こしています。

政界にもそのような認識を持ってほしいですね。大災害が引き金になって、日本の国債や円が暴落、金利が上昇となれば、大きなダメージを受けることは避けられません。さらに、これだけグローバルにビジネスが世界同時進行で動いている中では海外への影響も大きい。そういった日本としての責任について、政治家の方々には意識してもらいたいですね。

——地震関係ではいろいろな制度ができています。風水害については「緊急事態宣言」は日本にはないとのことですが、大災害が危惧される場合には、起こる前から政府から強い指示などが出せるしくみが必要だということですね。

東南海・南海地震をはじめ、地震に対しては、法律も含めて対策が進んでいます。たとえば、メディアにおいても、震度など一定の状況になれば、即時に情報提供に切り替わるなどの対応が徹底されています。とは言え、地震の予測にはかなり限界があります。

一方で、雨、風、台風については、ある程度予測できるので、緊急事態宣言とまでいなくても、それに順ずる何かを考える時期に来ているのかもしれませんがね。集中豪雨の過激化をはじめ、自然災害の脅威が高まっている近年の状況を勘案すれば、発災してから慌てることがないよう、前もって被害を抑制できる対策を先行していくべきではないでしょうか。

『大暴落 ガラ』は、政界や企業のトップの方々も読んでくださっているようで、雨は意外な盲点だった、こういうこと

が起きるのか、場面として非常にリアルに描かれている、といった反響がありました。

同時代にこの国で生きている人間同士として、自然の脅威に対して、一緒に手を携えて被害を最小限にするために何ができるのか。そんな思いを共有し、対策を考えることがますます大事になっています。

——最後の質問です。情報化社会で、情報があふれているような状況の今、私たちはどのように情報を取捨選択していけばよいでしょうか。

今は情報の過多の時代です。特にネットの世界の情報は玉石混濁で、正しい情報だけでなく、災害時に便乗して、わざと世の中を攪乱するようなデマが流れることも、残念ながら現実起きています。

たとえば雨が降って洪水の危機が報じられている時に、動物園からライオンが逃げた、といったデマの流布などです。これは極端な例かもしれませんが、やたらと危機感をあおる情報があるのも事実です。

どこからどういう意図を持って出された情報であるかをきちんと見分ける力が必要で、災害対策だけに限らず、情報を見極める判断力を常に訓練しておくことが求められます。そのためには、日頃から、たとえば、荒川の現状やどのような



対策がなされているのかという基本的な情報や、基礎知識を備えておき、ここまで雨が降ったらどうなるのか、という感覚やイメージを持っておくことが大事なのですね。

今回の小説では、象徴的に、国交省が想定している「3日間 72時間で550ミリ」を繰り返し書いて、あえて強調しました。2017年夏の九州北部豪雨では1日で1,000ミリも雨が降ったという報道がありましたが、たとえば気象情報を見ていて、1日でここまで雨が降っているんだと認識しておくことも避難を考える助けになるかもしれませんね。また、崖崩れの前兆として、異臭や音がするなど、普段と違う異変を感じたという経験者の声もあるようですが、そうしたことも基礎知識として持っていれば、大雨の時、近隣にも注意を向けることにも繋がりますよね。

万が一、最悪の事態にまきこまれることも想定し、3日間は自力で生き延びられるように備蓄しておくことも重要でしょう。電気だと平均どのくらいで復旧するのか、水道やガスはどうか、これらが全く止まってしまった場合、自分ひとりでもどうやって生き延びるのかを考えておくことです。自分で自分を守る、自分で家族を守る、近隣地域を守る。最低限自分でできることは自分ですることが基本だと考えます。

よく誰かが助けてくれるだろうとか、早く来てくれないと困るだとか、政府が、区が、市が、と批判も含めた声がありますが、まず、自分で自分を守ることを最低限の基本としつつ、隣のご老人と一緒に逃げるくらいの気概を持ってほしいですね。

——情報面においても基本となるのは、自助ですね。

はい、基本は自助の精神だと思います。なんでもかんでも政府に頼るというのは限界もあるし、現実的ではありませんよね。地震と違って、洪水の場合はいずれ水は引くわけなので、最低限それまでの時間、とにかく高いところに逃げておけば命は助かります。

つまり、大雨や洪水の場合は、自分はどこにいて、どこに逃げるか、どのくらいの時間逃げるのかを考えればいいわけで、できることはいくつもあるはずで、常にそれを意識しておく、あるいはいざとなったらできるように準備しておく、心の準備も含めて非常に重要なことだと思います。

——最悪な状況であっても自分でなんとかするためにはどうしたらよいかを考える上でも、発信側は伝えるべき情報をいかに関心を持たせられるように届けるかを考えないといけないし、受け取り側は普段から想像をたくましくして必要な情報を的確に選択できる力を身につけておかないといけないという話を伺いました。

防災を題材とした今回の小説の続編があれば、更に国の防災力があがっていくのではないかと強く感じました。今日は大変有意義なお話をありがとうございました。ますますのご活躍をお祈りしています。



## ■ インタビューを終えて

このたび、著名な作家である幸田真音さんにインタビューさせて頂く機会を得ることができました。

「情報」と「災害」という難しいテーマでしたが、幸田さんは豊かな見識から、始終分かりやすく丁寧に答えてくださいました。まさに「情報」を伝えるということはどういうことなのか、インタビューの場でも体现されていたのだと思っています。

おかげさまで、「情報」と「災害」に関するキーポイントがふんだんに盛り込まれた充実した内容になりました。思い出に残るインタビューとなりましたことに、改めて幸田さんに感謝申し上げますとともに、今後益々のご活躍をお祈りしております。

インタビュワー

河川政策グループ総括 横森源治